

今月号の歌稿には、たくさんの佐佐木由幾追悼の歌があった。その中から六首を選ばせてもらい、一括して後半に並べた。

渡り鳥多きは日向の幸なるぞ鳥インフルは変災とい  
へ 伊藤一彦

はるばる渡り鳥が渡ってくるのは、その土地が良い土地だからなのだ。災害を相対化してうたい、鳥インフルエンザの歌の中として秀抜。

アナログのアメリカ西部劇の中ブリーチデニムの空  
が広がる 山口和賀子

「ブリーチデニムの空」に感心した。初期のカラー映画たとえばイーストマンカラー。青が強くしかも褪色しがちだった。ブリーチデニムの空、「分かるなあ」という感じ。もちろん西部劇とデニムの連想もある。

雪に飽き雪かきに飽き書を読めば雪の場面がでてくる不快  
片岡なおこ

ユーモアの歌として読むのがいいと思う。「雪」を三回、「飽き」を二回出して、雪に降りこめられた雪国の人の退屈とユーモアを表現。

日が昇り炎燃え立つ氷上に頸をもたげる二、三羽の  
あり 鈴木勉

今月の六首は、オホーツク海に突き出た野付半島（国

## 短歌の現在

### No.370 今月の15首を読む

#### 佐佐木幸綱

後鳥が見えるらしいの歌で、どれもなかなかの作。この一首、のぼりくる朝日に向かって、逆光に二、三羽が見えるのだが、この一首ではシルエットなので何鳥か分からない。それでいい。前後の歌で白鳥と分かる。余談ながら、この野付半島では尾白鷺にも出会えるらしい。温かきコーヒーカップ掌に包み窓より測る昨夜よりの雪 佐々木智子

栃木県の作者だから、雪国というわけではないだろうが、雪が多い土地なのだろうか。今月の一連は、たつぷりの雪につつまれた午前の歌で、どれもなかなかいい。中でもこの一首、視線の表現が平和な時間を読ませて、とてもいい。なお一連中に「大地震の悲惨伝へる画面にもコマーションが入る幾度も入る」という歌がある。投稿の時期から見て東日本大地震とは無関係だが、今回の大災害を予感したような作で驚いた。

「これから」と書くための墨磨る朝は指の感覚すこし軽やか 金有美

過去にこだわっていた昨日までと決別した朝、と読んでいいだろう。今後のこと、未来のことを考えようとしているのである。何に書くのだろうか。読者には謎だが、その点はいい。ただ「すこし」に一考の余地あり。

亡き伯父のスキットルボトル身に馴染み胸に優しきウキスキーかも 松本秀一